

### <新刊紹介>西田勝著 『私の反核日記1979～1997』

萩原, 一雄 / ハギワラ, カズオ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

59

(開始ページ / Start Page)

94

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

1999-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020050>

西田 勝著

『私の反核日記』

1979～1997

萩原 一雄

一読驚嘆するのは、その殺人的とも言える強行日程である。西田先生は非常に頑健な方なのか、この一八年間に過労に因る口内炎（国内）と発熱（海外）の記述しかない。身体がその人の最も基本的な活動の条件だとすれば、先生の諸運動の根源は、まさにその恵まれた健康にあったのであろう。

法政日文の伝統の一つは、近藤先生以来、政治的に発言し行動するという点にあった。デモの先頭に立つ教授の姿に、私達学生はどれ程勇気づけられたことであらうか。

西田先生を衝き動かしているものは何か。一言で要約すれば、環境・人間あつての文学ということであつて、核はそれを根こそぎ破壊してしまう。これに対抗

する為には、地道な市民運動を積み重ね、地方自治体を動かし、国家や国連を地球的規模で包囲して行くという壮大な戦略。その基礎は個々人の草の根運動にあるとする先生の強い確信である。だから先生はどんな地方にも出かけて行く。参加者が十人であれ絶望しない。前途の困難を思いながらも屈しない根気強さと楽天性。書齋教壇型知識人の粹を大きく超えていて痛快である。それは先生が学生時代からの田岡嶺雲研究を通じて体得されたものだ。文学研究は、人間存在を圧殺する国家権力との拮抗なしにはあり得ないとする先生の思想の原点は随所に見られる。例えば旧植民地、占領地、交戦国に於ける日本語文献の収集への情熱など。

西田先生は感覚的な美についても筆を惜しまない。各地で出会う女性の美しさについても必ず触れられていて微笑を誘う。先生は魚介料理を好まれているようで、記録にはそれが圧倒的に多い。そのことは、先生がセーヌ河、ジェベニンゲン海岸、ネバ河などで水を掬うというさりげない記述と併せて、少年時代を静岡県清水市で過ごされた先生の原風景が浮かんで来る。先生と水

との縁は深い。海外航路の船員だった父上のこと、「平和の船」のこと。

私は一度だけ先生にお目にかかっている。一九五三年、小田切先生が豪徳寺から中目黒に転居される時、引越のお手伝いに行つた折のことで、堀切利高君、矢島浩三郎君と一緒にいた。西田先生は雑談で清水の漁師の生活を熱く話されていた。豪快さと繊細さが共存していると感じたのがその時の印象である。小田切先生の奥様が手作りの稲荷鮎を沢山出して下さった。西田先生はそれを見て、「君達、これを全部平らげたら労働英雄だ。」と冗談を飛ばされる。小田切先生も失笑される。

著書の中に、西田先生が三百グラムのステーキに挑戦される場面がある。先生は健康家なのだろうか。

（はぎわら かずお・一九五四年卒）

▽一九九八年日本・図書センター

三八〇〇円

△著者 文芸評論家、法政大学文学部教授を経て、現在、東北師範大学客員教授（中国長春市）。西田 勝・平和研究室を主宰。